

2026年2月24日（火）

老球の細道907号

青天の霹靂（へきれき）②

会津バスケットボール協会 室井 冨 仁

当初、主治医からガンと診断されてから、「なぜ毎年定期健康診断を受診しているのにガンにかかってしまったのだろう」と考えていたが、ある日私の考えが間違っていることに気が付いた。健康診断は「ガンにかからない」ためにするのではなく、「ガンを見つける」ために行い、「早く見つけて、早く治療する」ための手段に他ならないということである。

病気が重症になる前に見つかったことは、むしろ今回はラッキーだったのかもしれない。

ノイローゼになんかなる必要はない。国民の2人に1人はガンになる時代である。私だけがこの年になって無事でいられるわけがない。腰の脊柱管狭窄症でさえ高齢者10人に1人がなる腰痛症なのに、ちゃんとなってしまうている。かつて、健康だけが自慢で、病気になる自信がないと豪語していた私も残念ながら普通の爺様であった。

主治医からは「早期のガンかもしれない」と診断されたが、体調は極めて健康で無症状だった私は診断結果を受け入れることができなかった。ガンと思われる細胞診の病理診断の結果が出るまで3週間待たなければならなかった。それまで「ガンに違いない」「なんちゃってガンで誤診」の2つの考えが頭の中を右往左往していた。

同じ時期、あいづ体育館では県高校選抜大会（ウインターカップ県予選）が開催されていた。ガンノイローゼから解放されるためには好きなことに没頭することに限る。この大会において女子大本命の光南高校が帝京安積高校に番狂わせで敗れミラクルが起きた。この試合を目前で観戦していて、もしかしてパート2、私にも「実は良性でした」という診断がなされるのではないかというミラクルが……。

正式な確定診断を告知されるまでには2週間以上あることから、不安ノイローゼで貴重な時間をつぶすことはもったいない。最悪の状態も考えてガンに対する予備知識を勉強するために書店に行って適切な本を購入して勉強した。昨今の「国民に2人に1人はガンになる」の医療状況から、書店にはたくさんのガン関連の本が並んでいた。特に役に立ったのは下記の本である。重要な内容を簡単に記す。

*『がんと診断されたら最初に読む本』〈KADOKAWA〉：2人に1人がガンになる時代。その状況から「がんは国民病」。「がんの治療は、日進月歩で進歩している」。「がん＝不治の病」ではなくなっている。がんの治療は「標準治療」こそが最善のがん治療。それが受けられる病院で治療を。がんになったからといって、「あせらない」「あわてない」「あきらめない」、「最善を期待して、最悪に備える」、これこそががん治療にのぞむ最高の心構え。

*『5度のがんを生き延びる技術』〈幻冬舎〉：がん闘病はメンタルが9割。5年生存率2%でも突破して生きている患者がいる。後先考えずに目の前の苦痛さえ一つ一つ乗り越えていけば、あとはなんとかなる。医者が治すのではなく、自分自身の力で治っていく。

2冊とも前向きなスタンスで書かれてあり、長い闘いに向けての覚悟が決まった。〈続く〉